対象作品／湯本香樹実著『夏の庭』新潮社

夏の庭

弘前大学教育学部附属中学校　下　山　しずく

この本は木山、山下、河辺の三人の少年が人について考える物語です。ある日山下のおばあさんが亡くなりました。小学六年生だった木山と河辺はそれを聞いて人は死んだらどうなるんだろうと興味を持ちました。そこで根岸荘に住んでいる一人暮らしのおじいさんがもうすぐ亡くなるんじゃないかと噂（うわさ）されていたのでそのおじいさんを見張ることにしました。彼らは、はやく老人の「死」を見たいという思いで見張っていたでしょう。ですがある日見張っていたことがばれてしまい、それからは見張りに行くと何かと老人の肩もみや草むしりなどといった手伝いをしなければなりませんでした。日に日におじいさんとは普通におしゃべりをしたり、相談などをしていました。興味半分のおじいさんとの付き合いはただの見張る人と見張られる人の関係から不思議な友情に変わっていってしまいます。きっと、彼らにとっておじいさんとの付き合いは、初めての大人との友人付き合いだったのでしょう。世話をされるとか保護させるとかではない対等な付き合いのことです。そんな存在ができたある日見張っていた老人が死にました。「死ぬ」ということに対する好奇心から始まった彼らの付き合いは、その「死ぬ」ということで終わるのです。

彼らは、最初に望んでいたように老人の、「死」を発見することになるのですが、それは期待していたようなドキドキわくわくするものではありませんでした。彼らは初めて体験する身近な人の「死」に対する思いもよらなかった悲しみに包まれたでしょう。何故、さっきまで生きていた人が次の瞬間に死んでしまうのか、死ぬ前の瞬間と死んだ後の瞬間では息をしていないとか、心臓が動いていないという以外に一体どこがどう違うのか、何故、死ぬのが明日とかあさってではいけなかったのか、人間は大けがをしても生きているほどしぶといところもあるのに、何故、眠っているかのように見えるその身体からはもう魂が抜けてしまっているのか。

悲しい以上に、納得できないとても素朴な疑問がどんどん湧き上がってくるのです。そのとき初めて、私たちは頭では

「死」というものを理解していたつもりでも、実は全然理解なんかしていなかったことに気付くのです。

しかし悲しみ以上に、彼らはおじいさんとの付き合いの中で貴重なものを得ています。洗濯ロープの貼り方、包丁の使い方、ペンキの塗り方、庭の作り方。そして、ものの考え方。おじいさんは彼らにああしろこうしろというわけではありませんでしたが、おじいさんの人生に関わったことによって、今までの子供の生活にはなかったことを経験していくのです。

今まで自分だけで考えて煮詰っていたことも、おじいさんだったらなんて言うだろうかと、視点を摑(つか)むことで、彼らは確実に今までの小さい世界から抜け出して、冷静にその世界を見つめることができたのです。確かにこのときに彼らは「大人」になったのです。

彼らの子供時代はおじいさんの夏の庭とともに永遠に葬り去られてしまいました。この夏の終わりは彼らの子供時代の終わりでもありました。

彼らはそれぞれ、別の学校、別の土地で、新しい生活をすることになるでしょう。

それでも、大人になって彼らがおじいさんになってしまっても庭いっぱいのコスモスを忘れることはないだろうなと思います。